

# 言語習得の観点から大学導入教育を考える： 八戸大学「基礎演習・プレゼンテーション演習」の場合\*

貞 光 宮 城

## 目 次

1. 序
2. 大学導入教育の目的と目標
3. 大学導入教育をどうとらえるか
4. 授業内容
5. 評価方法
6. 結語

### 1. 序

大学生の基礎学力の低下が叫ばれて続けている。さらには中学高校といわゆるゆとり教育を受けた学生が入学する。さまざまな大学において、勉強から研究への橋渡しの対策として、レポートの書き方や、図書館の使い方、プレゼンテーションの仕方など、学術的日本語教育を目的とした大学への導入教育を実施している。

本稿では八戸大学における筆者の授業実践例を挙げ、大学導入教育のあり方を考察する。特に、学術的日本語運用に関する導入教育を1つの言語習得であるにとらえ、単に規則（書き方や方法）を説明するだけでは習得の域には達せず、段階的かつ体系的に学習者が学術的日本語を実際に運用する経験を積むことによって初め

てその目標に達することを論じたい。

### 2. 大学導入教育の目的と目標

八戸大学には大学導入教育として「基礎演習」「プレゼンテーション演習」を新入生向け必修科目としている。前者は春学期に、後者は秋学期にそれぞれ履修することになっている。クラスは8人前後のゼミ形式で行われる。その目的はシラバスには「『基礎演習』は資料の収集と活用、レポートの書き方を主体的に演習するのに対して、『プレゼンテーション』はレジュメの作成や発表を演習します」とある。高校までの「勉強」から「研究」への橋渡しを行い、自ら問題を発見し、調査し、その解決法を模索する。そしてその結果を文書（レポート）や口頭（プレゼン）で論理的に発表する、といった専門課程に進むための「研究活動」に必要な基礎的な訓練を行う目的で設定されている。簡単にいえば、学術的日本語の読み、書き、発表の技術を習得するために設けられた科目である。

各演習における学習者の達成目標は、春学期末にレポートを提出、秋学期中に少なくとも1

---

八戸大学ビジネス学部

\* 本稿は八戸大学学内研究会（2006年2月3日）の研究発表を元に執筆したものである。この着任初年度からの挑戦に対して、研究会のみならずその後も八戸大学の諸先生方から様々貴重なご意見をいただいた。記して感謝の意を表したい。なお、本稿における不備等は全て筆者に帰されるものである。

回はプレゼンテーションを行うということになっている。後述するが、筆者のゼミにおいてはさらに春学期に提出したレポートの改訂版を秋学期末に提出することを課している。

### 3. 大学導入教育をどうとらえるか

では前節の目的を持って設定された大学導入教育科目に対してどのような授業内容、授業展開が必要であろうか。当該の科目において求められているのは、単なる知識の伝達でもなければ、情報の紹介でもない。技術の習得である。大学において研究活動を進めていく上で必要となる学術的日本語の技術の習得なのである。

したがって、基礎演習・プレゼン演習の授業は特定の日本語技術を習得するための訓練の場とならなければならない。単に、論文とはどのようなものか、プレゼンテーションとはどのように行われるか、等々の知識を説明したり解説したりするだけではその科目本来の目的は達せられない。なぜなら、それだけでは学習者は実際に自分で論文やレポートを読んだり書いたり、さらに人前で発表したりできるようにはならないからである。外国語の習得と同様、トレーニングを重ね、体得していかねば到底身に付かない技術の習得を目指した科目なのである。

故に、授業内容も学習者が無理なく目標を達成できるよう、年間を通して計画立案されなければならない。授業を通して学習者が学術的日本語を段階的かつ体系的に体得していく必要があるからである。それには、その学術的日本語が実際に使用される様を目にし、それをまね、学習者自らも実際にその特殊な日本語を運用する経験を積み重ねることによってしかこの言語技術の習得は望めない。ある言語の文法規則の知識だけあっても、それを運用する訓練をしなければ実際に使えるようにはならないのと全く同様である。<sup>1</sup>

## 4. 授業内容

本節では、前節の理念に基づいて平成17年度から著者が実施してきた学習内容を提示し、反省も込め批判的に議論していきたい。より具体的には以下の5点についてそれぞれトレーニングの事例を挙げていきたい。つまり、読む・書く練習について、調べる練習について、レポート作成について、プレゼンの準備について、そして実際のプレゼンについてである。

### 4.1 読む・書く練習

言わずもがな、読解力・文章力は一朝一夕には身に付かない。最終的に量をこなさなければどうしようもない。しかしながら、論文やレポートの場合、型から入ることで、比較的短期間に学術的日本語の習得に近づけることができる面がある。その1つが、既に日本語を話すことができるという過信から生じてしまっている誤りに気付かせ、それを訂正することによって文章力を上げることである。普段使っている話し言葉の日本語を書き言葉という型に合わせるのである。

そこで採用したのが「日本語ドリル」である。ほぼ毎週ドリル形式で、日本語の基本的な使用法、表記法を確認していった。全面的に参考にしたのが齋藤(2003)である。これは一般的な日本語の使用について問題にしたものであるが、大学生にとっても極めて頻繁に起こしやすい間違いや誤解など全く共通する部分が多々あるため採用した。これを毎回テーマを決め、プリント問題とし、実際に授業中に学習者と共に考え、何が問題なのかを話し合った。

具体的に使用した課題の例(抜粋)は以下の通りである。

---

得理論の考え方「Usage-Based Model (使用依拠モデル)」に基づいている。日本の英語教育に対する永年の批判とも軌を一にするものであろう。(貞光(2004)を参照。)

<sup>1</sup> これは認知言語学における経験基盤型言語習

- (1) 文の首尾一貫性の間違い：  
「毎日深夜まで残業している彼が今日は珍しく定時で帰ったので、同僚たちは彼女でもできたのかとウワサになっていた。」
- (2) 構文書き換え練習：  
「マリナーズで5年目を迎えたイチローはヤンキースに入団した松井をすばらしいバッターだと言った。」  
⇒ \_\_\_\_\_ は \_\_\_\_\_  
に \_\_\_\_\_ だと言われた。
- (3) 話し言葉／書き言葉の書き換え練習：  
「トヨタの①一人勝ちが始まったのは米国のGMと小型社の②共同生産を決断したときからだ。」  
⇒トヨタっていう自動車を作る会社があるんだ。この会社が① \_\_\_\_\_  
のは、アメリカのGMっていう会社と、車を② \_\_\_\_\_ になったときからなんだ。

こうした問題をいくつかの文法上のテーマごとにそれぞれ7, 8問程度こなしていった。問題によっては、何が間違っているのか気付けない学生や、書き換えできないという学生もあった。既に日本語が話せるから大丈夫という甘えや過信があることを自覚してもらい、他人の間違いを見つけることで、自分も同じような間違いをしているかもしれないという意識を持ってもらうことを意図した。その上で、自分が実際に使用する際に注意するよう繰り返し指導していった。<sup>2</sup>

次に、読解のトレーニングである。これは次の段落構成とも非常に深い関連がある。当該科目の受講者は、論文の形式に慣れていないだけでなく、活字自体になじんでいない学習者も含

んでいる。これまで経験がないところにいきなり「読んでまとめよ」という課題だけを提示しても、効果的とは思われない。

そこで齋藤(2002)の3色ボールペンを導入した。実際は黒色を含め4色であるが、以下の原則に従って、文章を読みながら、線を引いたり、整理したりするのに色分けを活用する。

- (4) 3色ボールペンによる色分けの原則：  
青：客観重要。「まあ大事」というところに引く。  
赤：客観最重要。客観的に見て「すごく大事」というところに引く。  
緑：主観大切。自分が勝手に「おもしろい」と感じたところに引く。  
(齋藤2002: 10-11)

この訓練で意図したのは、見て分かるようにするである。つまり、論の骨格や流れそして思考や理解の整理を助けるために、読解という各自の頭の中だけの作業であったものを、互いに目で見て確認し合えるようにし、さらに色の切り替えによって視覚的に認識しやすくすることである。<sup>3</sup>

この3色ボールペンを通年一貫してことあるごとに活用し、ものを考える際の習慣として身に付けてしまうことを目指した。例えば、読解の線引きだけでなく、講義中の解説やメモを取る際の色分け、またレポートのテーマの絞り込みにも使用し(後述)、筆者が課題を添削する際にも同じ原則で線引きや書き込みをし、学習者にフィードバックした。

話を読解のトレーニングに戻そう。この3色

<sup>2</sup> ただし、厳密な文法的説明をする時間はなく、またこの科目の目的とも外れるため、最終的には学習者の日本語の直感に頼らざるを得ないのが実情である。

<sup>3</sup> この点に関して、齋藤(2002)にも以下のような指摘がある。

「脳みその中身をチェックするのは難しくても、三色ボールペンを使っているかどうかをチェックするのは簡単だ。それに加えて、どこに三色が引かれていたかをチェックするのも簡単だ。判断が視覚される効果は、大きい。」(齋藤2002: 52)

による思考の視覚化を導入し、課題を最初は読みやすいものから始め、徐々に目標である学術的日本語に近づけていった。具体的には、会話文で展開する戯曲風のものから、筋が分かりやすい短編小説、スポーツ新聞の記事、一般新聞の社説、レポート作成のための参考図書、そして論説の順である。

3色で線を引きながら読むという作業に合わせて、読後にそれを要約する、さらにその段落や文章にタイトルをつけるというトレーニングも行った。色分けして読み進めているため、文章全体のどんなところかどどのようなことが書かれているかを視覚的につかむことができ、不慣れな学習者も比較的取り組みやすい。(実際の課題は付録の〔資料1〕および〔資料2〕を参照されたい。)これが後述する、論文やレポートの段落構成のトレーニングと深く関わっていることは容易に理解されよう。各段落の骨組みを抜き出すことによって、文章全体の構成を視覚的に見て分かるようにするのである。他人の文章を解体することによって、論文やレポートには段落構成が必要なことを、頭で理解するだけでなく、目や手で体得してもらうことを目指した。

そしてついに、書くトレーニングである。もちろんこれまでの課題を通して書く訓練は行ってきている。が、最終的に自分のレポートを書くためには、自分で段落構成を組み立てていかなければならない。その練習のために以下のような「頭の整理」手順というものを導入した。

(5) 「頭の整理」手順:

- ① 頭の中の地図作り (Brain Storming)
- ② グループ分け (Grouping)
- ③ 順序付け (Numbering)

特に目新しいものではなく、いわゆるブレイン・ストーミングと呼ばれ、論文作成だけでなく議論の効率向上などにも広く利用されている

ものである。

この手順に従って、学習者の感想文をレポートに近づけることをねらった。つまり、いきなり書き始めない。思い付くまま書かない。予め構成を練ってから書き始める、をトレーニングし、体得するのである。当然最初は簡単で短いテーマで構成する練習をし、最終的に自分のレポートを仕上げるために、毎週少しずつ構成を練り上げていってもらった。

例を示そう。最初に書いてもらったものは「対話合宿について」である。付録の〔資料3〕は段落構成を指導する前に学習者が書いたものである。一見して分かる通り、感想文の域を出ない。そこで次のようなトレーニングを行った。

まず、感想文とレポートの決定的な違いである主張の一貫性と段落構成の必要性の確認である。つまり、レポートでは自分の意見や主張を明確にし、終始立場を一貫させるという点、そしてそれに基づいて上述したような段落構成を練った上で書くという点である。

しかし、「自分の意見や主張を明確に」といくら説明・解説を重ねても学習者は自分の意見や主張をすぐに持てるようにはならない。ここで、(5)の「頭の整理」手順を用いた。自分の意見や主張を生み出すのである。その最も簡単な方法として対立概念を利用した。(5)の手順にしたがい、①で白紙に思い付くものを書き込んでいく際に、例えば「対話合宿について」であれば、それが良かったのか悪かったのか、楽しかったのかつまらなかったのか、成功したのか失敗したのか、等々、肯定側と否定側に大きく紙を二分し書き込んでいく。そして、レポートを書くにあたり、肯定側で書くか、否定側で書くか、きっぱり選択してから次の手順②、そして③へ進み、選択しなかった側の内容は一切書かないようにするのである。こうすることで、極めて単純な意見ではあるが、レポートを書く際に首尾一貫した意見や主張を持つことができる。

次に、構成である。これも(5)の手順にした

がって練っていく。つまり、②グループ分けの段階で、同じ内容や関連する内容をまとめ、それを③順序付けし、自分の意見を述べるのにどの順序で論を進めるのが効果的かを構成する。それを〔資料2〕と同様の形式で、序論・本論・結論という自分のレポートの骨組みを、今度は自分が書くために作成し、はじめてレポートを書き出すのである。これを肯定側も否定側も別々に構成してレポートを作成し、段落構成の基礎を訓練した。

こうした手順を踏んだ指導後、先程と同じ学習者が書いたレポートが〔資料4〕である。内容はともかくとして、上述のようなトレーニングにより、ある一定の学術的日本語の型にしたがうことで比較的短時間でレポートの形式に近づくことがわかる。当然のことながら、このままでは練習量が圧倒的に足りない。しかし、全く書けなかった学習者であっても、基本的な型にしたがうことによってある程度までレポートや論文が書きやすくなるのは間違いないであろう。

この「頭の整理」手順は、学習者の自分のレポートテーマの決定や、問題点の発見、段落構成の決定等で使用し、レポートの完成まで段階的に絞り込んでいく過程で繰り返し用いた。(4.3節にて後述。)

#### 4.2 調べる練習

レポートを書くには関連情報をできるだけ多く得る必要がある。それにはさまざまな調査が不可欠である。当然、当該科目の学習者も研究活動の1つとして、「調べる」ことに慣れる必要がある。この点についても、調査とはこういうものだといくら説明しても、それだけでは実際に調べられるようにはなかなかない。八戸大学においても極めて有益な図書館利用指導が行われているが、それを拝聴しただけでは体得するまでには至らない。

そこで、文献を調査するとはどういうことなのかを、図書館の利用とインターネット検索の利用の2点について、実際に目にし、手を動か

して体験してもらい、それを自分のレポート作成のための調査につなげてもらった。

まず、図書館利用についてであるが、利用方法を図書館で指導してもらって以降、毎週1冊借り出し、ゼミに持参するという課題を出した。その書籍はもちろん自分のレポートのテーマに関連するものである。目的は図書館自体に慣れるということ、そして調査することに慣れるということである。最初はレポートのテーマとかけ離れた書籍を借りて来る学習者も、次第的が絞れてくるようになる。これは本を借りようとすることで自分のテーマ自体も絞られて来ることにもつながるのである。

続いて、借りてきた書籍を用いて文献カードの作成を行う。これも説明だけではなく、実際に学習者に作成してもらう。書名、編著者名、出版社名、出版年、等、全てである。実際に自分で作成してみないと、どの情報が書籍のどこに書いてあるのかさえ分からないままである。当然、こうして作成されていった文献カードはレポート提出時の参考文献に記されることになる。

もちろん、借りてきた書籍の読み方も練習する。常に最初のページから読み進めなければならないわけではなく、いろいろな読み方があることを紹介する。特に、レポート作成時の情報収集の際は、まずそれが必要な文献かどうかを判断する読み方が必要である。そこで、各自が借りてきた書籍の目次をコピーし、上述の3色ボールペンで最も必要な箇所を絞り込み、そこから読みはじめ、その他の箇所も読む必要があるか否かを判断するという読み方を実際に行ってもらっている。

もう1つはインターネット検索についてである。これも各自のパソコンで実際に検索してもらい、次の2点について厳重に指導した。調査資料の信憑性と盗用の禁止についてである。インターネット上には日記のような個人的な情報から政府刊行物のような公的な情報まで様々存在する。その全てが論文やレポートを作成する

のに参考資料として適しているかというところではない。そのことを実際に各自のテーマに沿って検索してもらい、確認していった。一方、盗用については、残念なことに極めて意識が低い。便利で手軽に入手し加工できるため、罪を犯していることさえ気付かない学習者もある。そこで、実際にインターネット上の情報をコピーし、自分のレポートにペーストするところをやってみせ、「これが盗用である」と厳重に注意している。合わせて、レポート作成時の参考文献および出典明記の重要性を繰り返し指導している。

### 4.3 レポート作成

前節までの学術的日本語の基本的なトレーニングと平行して、授業中に学習者には各自のレポートの作成に向け、その作業を毎回少しずつ順を追って進めてもらっている。最も留意する点は、レポート完成まで段階的に進めていき、学期末に全員仕上げ、提出することである。繰り返すが、いきなり「〇〇までにレポート提出」と課題だけ課しても、目標に掲げるようなものは到底書くことなどできはしない。少しずつ完成に向け進んでいく必要があるのである。その際、今自分がどの段階まで進んでいるのかを常に自覚してもらうために、以下のような「レポート作成の手順」を示し、毎回自分の位置を確認しながら進めている。

#### (6) 「レポート作成の手順」:

- ① テーマ決定
- ② 問題発見 ← 情報収集
- ③ 分析／考察 ← 情報収集
  - ・自分の意見を固める／解決方法を探る
- ④ 執筆
  - ・構成をねる(タイトル, 章タイトル, など)
  - ・書式設定(参考文献の書き方)
  - ・書く
- ⑤ 推敲

#### ③～④の繰り返し 完成

これは図書館でのレポート・論文のまとめ方の指導の際に説明された、「レポートをまとめるための10のステップ」を簡略化したものである(小松2005c参照)。

順を追って各段階での作業を概説しよう。まず①テーマの決定において、各自がどのようなどころに関心があるのかを、付録の〔資料5〕を元に上述した3色ボールペンで絞り込む。その後、(5)の「頭の整理」手順にしたがって、選んだテーマをさらに小さなテーマに絞り込む。これをレポート(A4で2枚の以上)のテーマとして扱える程度にまで(授業中ではさらに2段階)絞り込んでいく。そこで②そのテーマについて自分が最も関心がある事柄は何か、問題となるものは何かを、もう一度「頭の整理」手順を用い、発見していく。そして情報収集をしながら、③分析／考察を重ねて行き、その問題に対する自分の意見を固め、可能であればその解決方法を探る。④の執筆に関しては、上の4.2節のトレーニングで述べた通りである。自分の主張に関して再度「頭の整理」を行い、首尾一貫した論を構成し骨組みを作った上で、執筆を開始する。ただ段落構成のトレーニングの時と異なるのは、各週に1章ごと授業時間内に書き始めるという点である。時間内に書き終わらない場合は次週までの宿題とし、次回は必ず次の章から書き始めるようにした。最後は参考文献の書き方を確認し、レポート完成まで段階的に進めていき、できるだけ授業時間内に作業の目処を立て、学期末までに全員仕上げ、提出することを目指した。

こうして完成したレポートの内容を、秋学期にはゼミ内でプレゼンテーションする。そしてその時得られた質問や意見を元にさらに調査を重ね、学期末にその改訂版を春学期の倍のA4で4枚の以上のレポートとするのである。

#### 4.4 プレゼンの準備

では次に、プレゼンテーションの準備のために実施したトレーニングを概説する。別の必須科目との関連もあり、プレゼンはパソコンソフト（マイクロソフト PowerPoint など）を使って行う。ここでも留意すべき点は、説明だけに終わらず、実際にどんなものを作成するのか見て分かってもらい、段階的にスライドが作成できるようになるということである。

まず、文書による発表と口頭による発表と2つの方法に大きな違いがあることを確認してもらおう。つまり、春学期に作成したレポートは読んでもらって伝達する方法に対し、秋学期の目標であるプレゼンは目の前にいる人に、その場で見てもらって、聴いてもらって伝達する方法であるということである。そのためプレゼンでは視覚的にも聴覚的にも相手を意識した発表が求められる。

よって、発表スライドの作成においてもこの違いを意識して取り組んでもらう。そこでスライド作成の手順として段階的に各自のレポート → レジメ → スライドの順で作成して貰ってもらう。ただし、その前に基礎的な練習として、〔資料6〕にあるような、文章 ⇄ 要約 ⇄ 図式化を相互にトレーニングするドリルを行った。<sup>4</sup> 視覚的に、自分もそして相手も分かるようにするということがどういうことかを練習した上で、レジメを作成し、それを元にスライドを作成していく。ここでもレポート執筆時と同様に授業時間内に作成しはじめ、学習者間の進捗をできる限りそろえ、全員が自分のプレゼンまでにスライド資料を確実に作成できるよう指導した。そして、発表日前日までに作成したスライド資料を配布用ハンドアウトとして筆者と共に印刷し、発表の準備としている。そこで作成したスライドを1枚ずつ確認しながらプレゼン前の最終指導を行い、翌日の発表に備えてもらう。

<sup>4</sup> 齋藤（2003）の練習問題を改訂して使用。

#### 4.5 プレゼンの練習

ついに口頭発表のトレーニングとなるわけであるが、ここでの留意点もこれまで同様、体得してもらおう、である。つまり、他人のプレゼンを数多く見聴きし、実際に自分もプレゼンし、できるようになる、である。

口頭発表の練習は実は秋学期になってから始めたわけではない。4月の第1回目の授業から実施している。自己紹介である。学習者は最初の授業で2回自己紹介をしている。1回目は何ら指導せず発表し、指導後、もう一度発表してもらおう。その指導とは、筆者自身の自己紹介を2種類（悪い例と良い例）提示し、どんなところに違いがあるか、プレゼンに何が必要かを見て分かってもらうというものである。ゼミ初日という緊張感もあり、この時の教育的効果は極めて大きく、学習者の1回目と2回目のプレゼンの差は絶大である。<sup>5</sup>

秋学期のプレゼンについても同様である。学習者が順にプレゼンを始める前に、筆者が2種類（悪い例と良い例）プレゼンのモデルを見せ、良いプレゼンにするにはどうすべきかを再確認してもらった上で、発表してもらっている。この科目の目標はプレゼン技能の習得であるので、各自プレゼンは同じ内容で最低2回順番に行ってもらっている。目安として1回目は7分間、2回目は10分間と設定している。1回目で受けた質問や意見に対して2回目までにさらに調査を進め準備してくることを要求している。上述の自己紹介の場合と同様、この2回のプレゼンでの進歩は目覚ましい。学習者の実際の言葉をそのまま借りれば「みんなバージョンアップしてる！」のである。

さらに、発表者だけでなく聴者もプレゼンす

<sup>5</sup> その際、発表方法の指導と共に、メモを取る習慣をつける指導も始めている。その後の研究活動のための情報収集の最も簡単で重要な手段だからである。ここでも3色ボールペンを利用し、筆者の取ったメモを学習者に提示し、どのようにメモを取るかを見て理解した上で、実践してもらっている。

る必要があることを徹底させ、発表しっぱなしの状態を防止している。質疑応答の活性化である。そのために付録の〔資料7〕のようなプレゼン評価シートを使用し、互いにプレゼンを評価し合うのである。そこでは発表者自身も自己評価を行い、より良いプレゼン技能の習得を目指してもらう。この互いに評価し合う仕組みが、プレゼン後の質疑応答や議論の活性化に大きく活きてくる。<sup>6</sup>そしてこの評価を元に、宿題として各プレゼンに対する質問や意見を簡単にまとめたレポートを書き、翌週以降、それを発表者にフィードバックする。これも次のプレゼンの改善のために活用していくのである。

## 5. 評価方法

最後に各学期の評価方法を以下に示す。

### (7) 春学期の評価方法：

出席	宿題	レポート
25%	25%	50%
出席2点×13回 (遅刻1点)	各2点×12回	50点

### (8) 秋学期の評価方法：

出席	宿題	プレゼン	レポート
25%	25%	30%	20%
出席2点×13回 (遅刻1点)	各2点×12回	15点×2回	春学期の改訂 20点

目標なくトレーニングをするのは効率が悪い。これらの評価基準は各学期の初回の授業で学習者に明示し、それぞれの学期での最終目標を学期の最初に認識してもらってからトレーニングに入ることにしている。

評価方法を少し詳しく見ると、ゼミであり、演習であることにより、出席点の割合を高くし

である。出席して、授業中にトレーニングを積んでもらうことを重視しているからである。公欠の場合は欠席扱いはせず、得点は1点としている。授業中の活動に対しての得点だからである。

レポートに関しては、春学期の評価は10点ずつ次の5つの項目において評価される。①提出期限が守られているか。②枚数制限(A4で2枚以上)をクリアしているか。③段落をしっかりと練った上で構成しているか。④文献調査やデータ検索を十分行っているか。そして、⑤学術的日本語の使用は適切か、である。一方、秋学期については、5点ずつ次の4つの項目において評価される。①提出期限が守られているか。②枚数制限(A4で4枚以上)をクリアしているか。③段落をしっかりと練った上で構成しているか。そして、④文献調査やデータ検索を十分行い、それを図やグラフで分かりやすく表示しているか、である。春学期と異なる点は、どれだけ改訂されたかという点である。

ここで、学習者の秋学期のレポートが全体的に春学期に比べ格段に向上していることを記しておきたい。当然、推敲し改訂するわけであるから良くなっているのは当たり前かもしれない。それが、人前で発表することを経て、質問を受け、それに答えるために調査し、それを相手に分かりやすいように提示するという過程を通った上での推敲であり、改訂なのである。単に「より良いレポートに改訂せよ」と課題を出すだけではここまでの改訂は到底望めないであろう。

プレゼンの評価に関しては、得点上は、5点ずつ次の3つの項目を中心に評価される。①プレゼンまでの準備が十分であるか。②発表時の話し方は聞き手を意識しているか。そして、③時間配分は考慮されているか、である。上でも述べたが、発表前にどれだけ準備したかはプレゼンに全て現れる。それを共に学ぶ学習者同士でもお互いを感じるようになる

<sup>6</sup> 毎回授業終了時に学習者には短いコメントを書いてもらっているが、複数の学習者が議論の輪に参加したことにより素直に「プレゼンの時間はおもしろい」と書いている。

る。なぜなら自分自身も同じプレゼンのために準備をし、発表してきたからである。

## 6. 結 語

本稿では八戸大学における筆者の授業実践例を取り挙げ、大学導入教育のあり方を言語習得の観点から議論した。新入生の必修科目である「基礎演習」「プレゼンテーション演習」を、学術的日本語運用に関する技術を身に付ける言語習得であるとして、段階的かつ体系的に積み上げていく方式による学習メニューの実践例を紹介し、その必要性を訴えた。たとえば話すことができる日本語であっても、この特殊な言語使用技術を習得するには、外国語の場合と同様に、地道な作業が必要不可欠である。そのためには、授業はそれを実際にトレーニングする場でなければならず、単に書き方や方法を説明するだけでは習得の域には達しないことを論じた。

当然のことながら、ここに示した授業内容はまだまだ駆け出し教員の思い付きや思い込みに過ぎない面が多々ある。反省すべき点が山とあることをそっくり棚に上げての大言壮語も随所にある。学習者は大学生であるから、自ら考え自ら学んでいくという自学自習の意識とその習慣を身に付けることの方が重要であると考えられる向きもあろう。しかしながら、事態は急を要している。大学入学までにこうしたトレーニングを受けてきていない、あるいは身に付けてきていない学生がいるのは事実である。大学4年間で研究活動を行えるようになるには、自然に自覚し成長していくのをただ待っているわけにはいかないのである。

教育の効果は計りにくいといわれる。だからこそ今や大学はそれを何らかの形で提示できるよう求められているのではないだろうか。大学導入教育においては、論文が読めかつ書けるようになる教育が求められている。学生が1年間で着実に学術的日本語の運用能力を身に付けて

ゆくには、その授業内容は極めて綿密かつ周到に体系化されていなければならないと考える。

## 参考文献

- 井上ひさしほか文学の蔵編 (1998) 『井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室』新潮文庫。  
大野 晋 (1999) 『日本語練習帳』岩波新書。  
大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会。  
黒田 航 (1998) 「言語習得への認知言語学からのアプローチ」『言語』Vol. 27, No. 11, 38-45。  
小松良重 (2005a) 「平成17年度第1回図書館指導」於八戸大学・八戸短期大学図書館。  
小松良重 (2005b) 「平成17年度第2回図書館指導『レポート・論文のまとめ方』」於八戸大学・八戸短期大学図書館。  
小松良重 (2005c) 「平成17年度第3回図書館指導『プレゼンテーション入門』」於八戸大学・八戸短期大学図書館。  
齋藤 孝 (2002) 『三色ボールペンで読む日本語』角川書店。  
齋藤 孝 (2003) 『齋藤孝の実践！日本語ドリル』宝島社。  
坂原 茂編 (2000) 『認知言語学の発展』ひつじ書房。  
澤田昭夫 (1984) 『外国語の習い方』講談社学術文庫。  
貞光宮城 (2004) 「英語第二公用語論とは何か」*Osaka Literary Review* 43, 13-30。  
貞光宮城 (2006) 「認知言語学における言語習得の観点から日本語教育を考える—『基礎ゼミ、プレゼンゼミ』を例に—」研究発表資料 八戸大学学内研究会 (2006年2月3日)。  
佐藤良明 (2004) 『これが東大の授業ですか。』研究社。  
白井克彦×枝廣淳子 (2005) 『早稲田の杜から「変える力」を考える大学力』主婦の友社。  
外山滋比古 (1995) 『文章を書くところ』PHP文庫。  
八戸大学 (2005, 2006, 2007) 『「基礎演習とプレゼンテーション」の手引き』テキスト 八戸大学。

- 八戸大学 (2005, 2006, 2007) 『講義概要 (シラバス)』 八戸大学.
- 馬場祥次 (2005) 「プレゼンテーション」八戸大学『情報処理 D』 テキスト, 105-116.
- プリンス頓・ビュー編著 (2000) 『TOEFL テストライティング』 SSCommunications.
- 本多勝一 (1982) 『日本語の作文技術』朝日文庫.
- 増田晶文 (2003) 『大学は学生に何ができるか』プレジデント社.
- 松本 茂 (1996) 『頭を鍛えるディベート入門』講談社.
- 丸谷オ一 (1980) 『文章読本』中公文庫.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版.

付録

〔資料1〕

色分けによる読解のトレーニング課題例

多くの社会において平均寿命が延びてきていることが報じられている。戦後、日本においても寿命の延びは飛躍的である。それは社会の近代化に起因すると私は考える。この現象の最も大きな原因には、次の3つが挙げられる。医学の進歩、健康教育、そして職場での安全基準の改善である。

第一に、現代医学が人間の寿命を何年も延ばした。これは外科技術の進歩と製薬会社が果たした発展の結果である。その明白な例が心臓手術である。過去20年間に、バイパス形成手術は一般的になり、成功率も著しく高くなった。患者の寿命を20年から30年延ばすこともある。深刻な心臓発作を経験した中年も、手術後まもなく通常の生活に戻ることができるケースも多くなってきた。

寿命が長くなったもう一つの原因は健康教育である。科学的発見と医学報告書のおかげで、人々は食品や健康一般に関する知識を益々増やしている。さらに、美容健康が日本では大きなビジネスとなっている。どのようなスポーツでも活動でも運動でもすることができるような、選択できる美容健康クラブも多い。また、日本政府は喫煙や飲酒や麻薬の危険性や脅威を一般大衆に警告することによって、健康意識を高める大きな役割を果たしてきた。

最後に挙げる原因は、各企業に課せられる厳しい健康・安全基準である。日本政府による各企業に対するこれらの規制が産業上の危険から従業員や一般の人々を守っているのである。政府立法により工場や機械や乗り物の公害規制が実施され、このことが日本の生活の質の向上と平均寿命を延ばすことに役立っている。

以上のことから、日本人の平均寿命が延びているのは、科学や医学の進歩、健康意識の高まり、政府による安全や公害に対する規制の結果であることがわかる。つまり、日本においても近代化が平均寿命を延ばしているといえる。今日本では、定年後に長生きしていく人々を今後どのように養っていくのが大きな問題の一つとなっている。

[資料2]

要約および段落構成のトレーニング課題例

タイトル「」

序論

主張：
-----

本論

論点1： 例
-----------

論点2： 例
-----------

論点3： 例
-----------

結論

--

キーワード：

自分の意見（賛成か／反対か）：

[資料3]

学生のレポート（段落構成指導前）

科目 基石礎演習

学籍番号

「対話合宿について」

今月の20、21日に新入生を対象にした対話合宿がありました。初日、まず最初にもぐらんぽに訪れて、たくさん種類の魚を見る事ができました。

大学から出発する時は天気が悪くて、ウォークラリーができるか心配だったけれども、グリーンピア田老に到着した時には、雨も上がっていたので予定通りウォークラリーができました。ウォークラリーの中で行われた色々なゲームは、自分の予想以上に難しく、なかなかポイントを稼ぐ事ができませんでした。しかし、今回のウォークラリーを通じて、新たな友達を作る事ができ、また仲間同士協力し合って、物事に挑戦するという大切さを学びました。

2日目には、ゲートボールの奥技講習会があり、いざ挑戦してみると、これがなかなか難しいもので、最初の第1ゲートを通過する事さえ困難でした。ゲートボールを普通にこなしているお年寄りの人を見て、改めてお年寄りの人々のパワーを知る事ができました。合宿で最後に訪れた琥珀博物館では、今までテレビで見ただけで見た事がなかった琥珀を真近で見れたのでとても感動しました。以上の体験はこれから一度とできないものだったので、良い思い出になりました。

[資料4]

学生のレポート (段落構成指導後)

宿題

反対意見のレポートを書いてくる  
(反対の方)

2019

科目 基礎演習

学籍番号

対話合宿について

4月20・21日の2日間、新入生を対象にした対象合宿があった。私は今回の対話合宿は失敗だったと思う。

理由は3つある。(1)目は「モザイク」で「琥珀博物館」に訪れた事である。私は以前何回か訪れた事があったので、あまり面白くなかった。友達の中にも、何回か訪れた事があると言っていた人が多くいた。

(2)目は、初日の昼食の焼肉である。私は他の3人と一緒に食べていたが、ひとつ気になった点があった。それは肉が少なかつた事である。お腹いっぱいになるまで食べようと思っていたけれども、満足できないまま肉がなくなってしまったので、満足できなかった。

(3)目は、ウォークラリーである。友達をたくさん作る目的で行かれたウォークラリーだが、実際ほとんどの人は前から友達だった人しか会話をしていた。その結果、私は3人程しか友達を作る事ができなかった。

以上の3つの点から、私は今回の対話合宿は失敗だったと思う。



[資料6]

文章 ⇔ 要約 ⇔ 図式化のトレーニング課題例

文章：

ビールに関していうと、私は重さと苦みのバランスのとれたものが好みだ。

私が思うに、A社の「春のさわやかな風ビール」は、軽くてさっぱりとしていて飲みやすいのだが、苦すぎもせず、甘すぎもせず、自己主張が少なすぎる。B社の「樽生できたて」のほうが、「春のさわやかな風ビール」よりも重さがあり、私は好きだが、なぜか少し甘みが多いのが気になる。C社の「男なら飲んでみる、ウルトラドライ」は、「春のさわやかな風ビール」、「樽生できたて」よりもどっしりと重く、この重さが男なら飲んでみる、と言わせているのだな、と思えるのではあるが、その重さに比べて苦みが足りないようだ。男なら飲んでみる、というなら、もっと苦みが強くてもいいのではないかと残念なところだ。苦みでいえば、D社の「八戸限定うみねこの足跡ビール」がいちばんだ。しかし、「男なら飲んでみる、ウルトラドライ」と比較すると、喉ごしが軽すぎ、どうもしっくりこない。

人の好みはさまざまだが、私に関しては、未だ「これだ！」と思えるものに出会えていない。今後の各社の商品開発に期待するばかりである。

レジメ：

A社「春のさわやかな風ビール」

・  
・

B社「樽生できたて」

・  
・

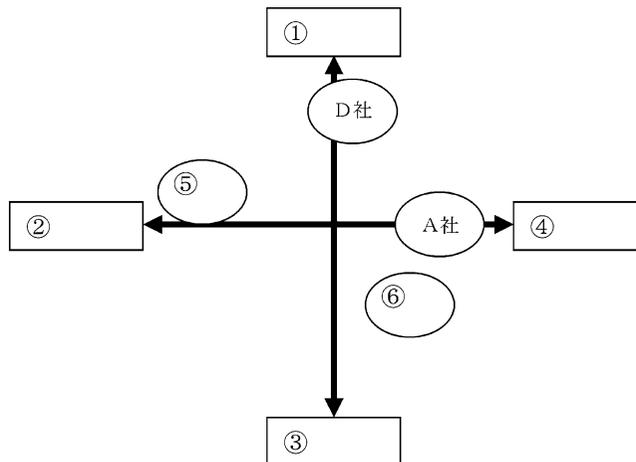
C社「男なら飲んでみる、ウルトラドライ」

・  
・

D社「八戸限定うみねこの足跡ビール」

・  
・

図式：



[資料7]

プレゼン評価シート

<プレゼン聴者用メモ>

発表者： \_\_\_\_\_

評価項目	評価	コメント
聴き手を意識していたか (声、態度、視線、等)		
時間の過不足		
プレゼンの目的は明確か		
説明の構成、順序は わかりやすいか		
スライドはわかりやすいか (文字、図、グラフ、等)		

良い点

・  
・  
・

悪い点

・  
・  
・

質問

・  
・  
・